

「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」

第5回公開研究会

講師：道下徳成 氏

日時：2018年2月10日（土）

15:30～18:00

場所：政策研究大学院大学 4B会議室

冷戦期の「海洋戦略」における核兵器の役割——太平洋戦域を中心に

○岩間氏 時間になりましたので、そろそろ始めたいと思います。

きょうは本学の道下先生に御登壇いただきます。もう御紹介の必要もないと思いますけれども、どちらかというところ朝鮮半島の専門家として認識なさっている方がほとんどだと思いますけれども、「冷戦期の『海洋戦略』における核兵器の役割——太平洋戦域を中心に」ということで、日米関係及び海洋戦略に関してもずっと研究を続けていらっしやいますので、本日はその成果の一部ということでお願いしております。

それでは道下先生、お願いします。

○道下氏 皆さん、こんにちは。勝手知ったるですので自分で操作します。御紹介いただきました政策研究大学院大学の道下でございます。本日は2時間というすごい長い時間で、本当にあれっと思って時間を確認して2時間だって、ええ、マジで2時間本気でやるのかなと思いましたがけれども。

○岩間氏 でもしゃべるのは1時間で、たくさん質問が出ますので。

○道下氏 ああそうですか、ただ2時間あると思ってちょっと分量も多くしてしまったのですけれども、おつき合いいただきますので、どうぞよろしくお願いします。

本日の内容は「冷戦期の『海洋戦略』における核兵器の役割——太平洋戦域を中心に」ということですが、岩間先生のプロジェクトが核兵器あるいは核戦略をめぐるプロジェクトということで、今お手元にまずはお配りしたものを紹介しますと、この黒い線が入っていますのが本日のレジュメですので、それに従ってお話をし、この写真がついているものが資料です。ここに出ているものと同じですので、見にくい場合はお手元で見てください。

それから、これがちょっと部数が足りないのも後で、分量が多いのも時間がかかって間に合わなかったのですが、今コピーしていますので後で補充しますけれども、これが今実は私自身が本にしたいと思って研究しているプロジェクトでありまして、冷戦期、特に1980年代ぐらいの太平洋における軍事戦略の研究です。対象は当然当時はソ連ですし、ソ連の戦略に対して日本とアメリカがどのように対応したかということが中心課題ですが、本日はその中で核が関係する部分というのを取り出してお話しすることになります。

それからもう一つ、このニューヨークタイムズのコラムは、たまたまきのう出たので持

ってきたのですけれども、平昌オリンピックがあるということで、安倍さんもたまたま行くことになりましたので、これの内容は、要はいかに日本が実は韓国の防衛にすごく貢献しているかという、これは本当に貢献しているのに余り知られていないのでムカついていたので、それをこの際、一気に吐き出してみましたので御参考に。これは関係ないのですけれども、平昌オリンピックをやっているということで御参照までにお配りいたしました。

それでは早速内容に入っていきたいと思うのですが、レジュメに従ってまいります。

大きくは、まず「海洋戦略」というものが何かといいますと、冷戦期、特に80年代ですね、80年代にアメリカの海軍が中心となつてつくった戦略で、対ソ戦略です。英語では「Maritime Strategy」という名前で、この大文字のMと大文字のSでこれは固有名詞ですので、独特のその時期にたまたまできた米海軍の戦略ということで御理解ください。

その「海洋戦略」というのは基本的に、その作戦内容というのが4つぐらい大きい柱がありまして、1つ目は、英語で書いてありますが、前方展開してASW operationをするというのは具体的にはこれですね。まさにソ連の戦略核潜水艦をやっつけるというのが1つの柱。2つ目がground strike operationsということでソ連に対する対地攻撃、海洋戦力を用いた攻撃。3つ目がamphibious landing operationsということで、これは海兵隊が中心になりますけれども、上陸作戦。そして4つ目がnuclear counter-strike operationsというので、詳しくは後でお話ししますが、戦術核あるいは戦域核兵器を維持することによって基本的にはソ連が核を使ってくるのを抑止するという、核戦争になるのを抑止するための核戦略ですけれども、そういうものです。

この4つの柱が「海洋戦略」にはあるのですが、その中の、これは一応全部研究しているのですが、特に核に関係がある①と④の部分をきょうは取り出してその話をしたいと思っております。

まずこの大きい1というのがありますが、これの「1 ソ連の核戦略の変化と米国の『海洋戦略』」というのがこの①に当たる部分で、④に当たる部分が5ページ目からあります。「『海洋戦略』における米国の核兵器の役割」というところですので、それぞれ海洋戦略の基本作戦要素の①と④に当たるものであるという認識で聞いていただければと思います。

それでは早速まずその第1番目のソ連の核搭載潜水艦をやっつけるというforward ASW operationsのほうですね、その部分のお話です。

この「海洋戦略」は、1つ目の核にかかわる部分というのは、実はアメリカの核戦力あ

るいは核戦略に関係するものではなく、ソ連の核戦略の変化をアメリカが利用したということ、核問題に関係があるからきょうこの場で取り上げましたが、そういう側面です。ですから、「ソ連の核戦略の変化と米国の『海洋戦略』」ということになります。

具体的にはどんなことが起こったかといいますと——きょうはポインターないですか、ありますね。それで、まず 1 つ目で、ソ連かどうい核戦略をつくったか、変化があったかといいますと、70 年代の後半ぐらいからいわゆるバスチョン戦略というのを採用いたしました。それはどういうことをやったかというまさにはこれで、ここに書いているデルタ III 型という、ソ連名は「プロジェクト 667BDR」と言うのですけれども、デルタ III 型の原子力潜水艦を太平洋艦隊に配備し始めました。これきょうは太平洋戦域のことだけお話ししますから、同じようなことを大西洋でもやっているのですけれども、太平洋は 8 隻から 9 隻ぐらい配備いたしました。

この潜水艦は、配備されたのは太平洋のオホーツク海のあたりですけれども、意図としてはアメリカをやっつけるための戦略兵器です。ですから、ここに載っている SS-N-18 というのはアメリカに届くというものです。これを 16 発搭載しておりまして、この 16 発の SLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）に、弾頭数が、弾頭が 1 発から 7 発、1 発積んでいるやつと 3 発積んでいるやつと 7 発積んでいるやつの 3 つのバージョンがあって、複数弾頭の場合は MIRV 化されて、独立してそれぞれ別の目標を攻撃できるものでした。なので、理論値としては、弾頭数は 144 発から 108 発ぐらいをこの SSBN で太平洋に配備することができたということです。ただ、実際は全部の単弾頭を載せているわけでもありませんし、逆に全てを 7 つ弾頭が載っているやつを積んでいるわけではないので、実際は何発か知りませんが、500 発とか 600 発とかそのぐらいをこれが搭載していたということになります。

ちなみに、1984 年の時点でソ連海軍の SSBN というのは 62 隻あって、940 発の SLBM を持っていて、約 2,000 発の弾頭を搭載しておりました。これがソ連の戦略核弾頭の約 25% を占めていたということで、かなり 80 年代中盤には何となくソ連というのは SS-18 なんかもあったのですごく ICBM に依存しているというイメージがありますが、弾頭数でいうと 25% は海洋核というか、SLBM になっていたということです。そのうちの 9 隻ぐらいの、これが全部ではないのですけれども、もう少し古いのもありますけれども、その重要な、当時最先端だったデルタ III 型が 9 隻あったということです。

このデルタ III 型をここのバスチョンですね、オホーツク海で運用するというアイデアで

して、何でオホーツク海で運用するのがいいかといいますと幾つか理由がありまして、まず 1 つは、陸地から近接しているので支援しやすい、サポートしやすいということです。アメリカの潜水艦なんかが入ってきたらちゃんと対潜水艦戦ができやすいということがありますし、それからソ連の潜水艦も用意をしているわけですから守りやすい。それから水深が結構深いので、深いところに潜って隠れることができます。しかも交通量がオホーツク海というのはすごく少ないので静かなのです。そうすると、静かだと敵の潜水艦、アメリカの潜水艦が入ってくるとそれを探知しやすいのです。逆に南シナ海なんか実はめちゃくちゃうるさいので、あそこで今中国は **SSBN** を運用しようとしていますけれども、それを探さうもうるさいから雑音が多いけれども、探されるほうも雑音が多いから敵のアメリカの **SSN** が、攻撃型の潜水艦が入ってきても多分探知できないのではないかと思いますけどね。いずれにしろ当時はそういうわけでここがよかったと。それからあと、千島列島がありますから、これで一応自然の要衝にもなっていて、ここに入ってしまうと、ここを突破して入ってこないとここに入ると来られないので中は守りやすいと。

それからソ連は当時へんてこな法的な議論をしていて、中国の九段線とかと似ているのですけれども、このオホーツク海と日本海、実は閉鎖海だと、**closed sea** だという法的議論をしていて、**closed sea** だからこの沿岸国以外の海軍の艦艇は勝手に入っちゃいけませんという議論をしていたのです。それは無視して、本国をそれこそ航行の自由作戦でアメリカはがanganそれを攻めて入っていったのですけれども、当時も航行の自由作戦をしていましたけれども、ソ連としてはそういう議論もしていたということで、オホーツク海をバスチョン化するのが非常によかったということです。

バスチョンにしたからには、今度はこれを守らないといけなくなるので、守るために何をやったかという、コンセプトとしては海洋支配というのと海洋拒否という、防衛ラインみたいなものをつくると。**sea control** と **sea denial** という、コンセプト上ですけれども、そういう防衛線を引くと。この海洋拒否線が大体 **2,000km** ぐらいですから、カイリに直すと **1,000** カイリちょっとぐらいですね。ですから、よく当時日本は **1,000** カイリシーレーン防衛と言っていましたけれども、あれがいかにも、要はソ連の防衛網を突破していくのを、アメリカが突破して入っていくのを日本が支えていたということがわかりますが、そういうことです。

このオホーツク海の **SSBN** を守るために攻撃型潜水艦 **SSN**、それから対艦ミサイルを搭載した原子力潜水艦 **SSGN**、それからバックファイアみたいな爆撃機、これもバックフ

ファイアという何しようとしていたのだらうと思うかもしれませんが、何となく日本ではバックファイアは日本にとって脅威みたいな言い方していましたがけれども、別に日本なんかを気にしていないので、基本的にはアメリカの空母をやっつけるために対艦ミサイルを搭載して、どばっと一気に出して、空母を見つけて、集中的に飽和攻撃というか、一斉にばあんとミサイルを撃って飽和攻撃して空母を破壊するというのがバックファイアの目的でした。それから海上艦艇を配備して、それでここにアメリカがうようよ入ってこないようにして守るということをしていたわけです。

いずれにせよ、これの重要なポイントは、ソ連がここに虎の子の SSBN、アメリカとの直接対決ですから、やはり冷戦期というのは 2 つの重要な米ソの対決の場があって、1 つはヨーロッパ戦線ですね、もう 1 つが米ソの直接の戦略核バランスをめぐる競争だったわけですがけれども、その 2 つ目ですね、太平洋戦域が米ソの直接の戦略核バランスをめぐる競争の場になったわけです。ですので、重要性が高まったということです。

次に、それではこういう一連のソ連の動きをアメリカはどのように分析していたかといいますと、まだ最初のころは実は 70 年代の途中まではソ連は西側の sea lines of communication、要は海上交通路、SLOC を攻撃する、SLOC 破壊というのが割合重要な目的になっていまして、そういうことで 1970 年と 1975 年にはオケアン演習というのがあったのですけれども、それはどういう演習だったかという、ぶあつと艦隊がこの太平洋の南のここら辺に出てきて、そこら辺で、要は西側の SLOC を disrupt するための作戦の演習をしていたのです。これは SLOC を破壊するというのがソ連海軍の基本的な戦略だなどこっち側は思っていたのです。それがだんだん 1972 年～1973 年にかけてゴルシコフというソ連の海軍の提督さんが新しい海軍ドクトリンを出してきて、戦争終結における牽制艦隊みたいなものの重要性を強調するというようなことをしてきたわけです。ただ、書き物にはそのような話が出てきていましたけれども、まだ 1975 年にはまたオケアン演習 75 というのをやったので、やはり SLOC 防衛だなど思っていたのですけれども、だんだんそういうソ連が言っていることがちょっとずつ変わってきて、それを最初に気づいたのはこの 1977 年の James M. McConnell さんという海軍分析センター、CAN です、The Center of Naval Analyses にいたおじさんが分析をして 2 つのことを、こうじゃないかという新しい分析を出しました。1 つは、ソ連の SSBN はソ連の最高政治指導部の直接の指揮を受けていて、戦争終結の局面におけるレバレッジとしてこれを使用しようとしている。2 つ目は、ソ連は SSBN をオホーツク海の要塞に配備して、これを防衛しようとするという解釈

を出しています。

ただ、当時はまだこの海軍情報部ですね、CNAは一応海軍の外郭団体みたいなものですが、海軍の中にある海軍の情報部、Office of Naval Intelligence ですね、ONIは、この分析に、ええ本当かなみたいな、いやいやちゃんとオケアン演習やっているし、ソ連はそんなことまでやらぬだろうみたいな話だったのですが、雰囲気が変わったのが1980年に今度は当然またオケアン80で似たようなことをやると思っていたらこれやらなかったのです。それで海軍の分析部のゲゲっと、えっ、オケアンやらないんですかとあって、これはひょっとしたら何か変わっているかもしれないということがあって、あと実際ONIのほうは結構ソ連の動きというのは実態を見ているから、同様の分析に結局至ったということです。

このところで、このCNAとONIの分析のずれがあったというのは、これ結構我々研究者にとってもおもしろいところで、このずれが出やすいのはなぜかという、我々研究者は結構 content analysis で、文字で読むじゃないですか、それでこういう何か変化しているのではないかみたいなことを言うわけですね。これONIとかオペレーションのほうのインテリジェンスの人は、相手がどのように運用しているかを見て分析するわけです。だから大体変わるの、まずコンセプトは紙の上で変わるけれども、それはオペレーションにはまだ反映されないですね。それで、紙の上で議論していろいろ内部で議論して、これでやってみるかといって初めてオペレーションのいろいろな面で変化が出るので、そこはだから我々のような content analysis をやっているような研究者のほうは実は先に変化を見つけやすいのです。ただ、それが本当にオペレーションに反映されるかどうかまではわからないわけですね。そのオペレーションのほうの分析をやっている人は、読んで細かく分析するということは余りやっていないし、そういう能力もそこまで高くないとすると、早く察知するというのはできないのだけれども、実態がわかっているのも本当に変化があったらわかるということで、そのギャップが出たということです。

いずれにせよ、それでも海軍のほうもはっきりそういう分析になってきて、1980年代中盤のアセスメント、具体的に言うと、1985年に出された National Intelligence Estimate という最高レベルの分析文書ですけれども、それにはソ連は SLOC 阻止よりも SSBN の防衛やアメリカの核搭載艦艇——これは空母ですけれども——に対する攻撃をはじめとする攻撃を重視しているという分析を出しました。

さて、そのように分析が変わったのですが、ではそれがアメリカの戦略にどう影響を与

えたかということですが、ソ連の戦略の変化が影響を与えたという部分もあるのですけれども、実はそうでなくても、そもそもアメリカのほうもだんだん海軍戦略というか海洋戦略が変化しつつあったのです、その前から。その流れがどういうものかという、海洋戦略というものができつつあった、その萌芽が出てきたのが 1977 年の Project Sea Strike という、これちょっと間違えて「James Hayward」となっていますが、「Thomas Hayward」です。直してください。このおじさんが Thomas Hayward さん。この太平洋艦隊司令官で 76 年から 78 年だったのですが、彼らの時期は太平洋軍司令部って何となく我々が近くにいるし、なじみ深いから結構重要なのではないかと考えていますが、実はこのころはもう本当に 70 年代とかは岩間先生の世界で、もう要は欧州正面が全てだったので。もう太平洋なんかはゴミみたいなもので、本当に。だから、どういう作戦になっていたかという、もう欧州で戦争が起こったら全部スイングして太平洋艦隊にあるアセットとか太平洋にある空軍アセットとか海洋上のアセットは全部、全部ではないですけども、主力はもう全部あっちに持って行ってしまって、こっちはすっからかんになると、そのようになっていたのです。

です、それを太平洋艦隊司令官になった彼は見て、なんじゃこれはという感じになって、当時はそれなりにソ連もここ太平洋艦隊を増強してきていましたし、グローバル化してきてアジアの重要性がだんだん増してきていましたから、それなのに何ですっからかんになってしまうのという感じで、そんなむちゃくちゃなということを感じたわけです。

それで彼としては、これはいかんというので、自分も太平洋艦隊の司令官になったということで、太平洋艦隊をグローバルな海軍戦略の中に位置づけたいと。それで具体的にはもっと、それまでは戦争が起こっても後ろのほうでぼけっと見ていて、主力はスイングされてしまってそれ以外はもう別に本当に攻勢的に出て行って何か積極的にやるというよりも、ぼけっと見ているというような戦法だったのですが、それをちゃんと攻勢的に攻めて行って、ソ連の戦力をアジアに縛りつけるとかそういう戦略的な意味のある仕事をしないとだめだということで、あるいはその同盟マネジメントの話もあって、日本が中立化されないようにぐっと、後ろでふらふらしていたら日本だってアメリカが来てくれるのかどうかかわからないから、中立化されてちょっとソ連に脅されてアメリカは助けてくれないなら、「アメリカを助けませんからやらないでください」とソ連に頼んで許してもらおうということもあり得るので、そういうことができなくなるということで、とにかくぐっとも最初から出て行って日本も engage して、ソ連を engage して、ソ連が身動きできないようにし

で日本もソ連になびいたりしないようにするというをやったほうがいいのではないかみたいなアイデアを出したわけです。

そういう考え方がまた 1978 年に **Sea Plan 2000** というものができてきて、これもこの **Hayward** の考え方なんかを取り込みながら、これは海軍全体でできてきたものですが、アメリカの海軍を攻勢的に運用することによってソ連を守勢に立たせて、西側の **SLOC** の攻撃に用いにくくするとともに、グローバルな軍事バランスに影響を与えるということです。このときはまだ西側の **SLOC** の攻撃に用いにくくするというので、要はソ連が **SLOC** 破壊をやってくるという前提でまだ考えていたわけです。

この戦略の変化は、もちろん海軍が純粹に海洋戦略のあり方を考えて頑張りましたという側面もありますが、もうちょっと政治的な側面としては、当時のカーターのときの戦略というのは本当にヨーロッパ正面で、特に地上戦と航空戦がもう重視で、海軍なんかはどうでもいいという海軍軽視戦略だったのです。海軍としてはこのままでは一気にすごい **marginalize** されてしまうということで、自分の役割をちゃんとすごいことができるのだということで何か出していかないとしょぼい扱いになってしまうということもあって頑張ったという面もあります。

ですから、こういう海軍をもう少し攻勢的に意味のある使い方をしようと、ちゃんと戦略をつくろうという流れができていたときにたまたま **SSBN** がバスチョンで運用されるのではないかと、インテリジェンスのほうからの話が出てきて、それが合体したということになります。それで合体して、ではこれをどう使うかなというのを考えて、いわゆる対 **SSBN** 戦略 (**anti-SSBN strategy**) というのをつくりました。これは、要はバスチョンに逃げ込んだ **SSBN** を通常戦力、特に攻撃型潜水艦を中核とする攻撃戦力を送り込んで破壊してしまうということです。その目的はどういうものかという、そうやって **SSBN** というのはもう本当にソ連にとってもアメリカにとってもそうですけれども、虎の子中の虎の子なわけですね、それをやっつけられるかもしれないということで、ソ連の認識に影響を与えて、自国の核戦力の安定性に疑問を持たせることによって対ソ抑止力を強化し——兵器におけるですね——そんなに核が、自分の核、一番重要な脆弱性が低いはずの核戦力さえやられてしまうのだったら戦争をやっても意味ないと思わせる。それから万が一それでも戦争が起こった場合は核へのエスカレーションを抑止する。そして実際に相手の **SSBN** をやっつけていくと戦略核バランスが変わりますから、それを有利にすることによってアメリカに有利な形で戦争を終結させるというような目的を想定していました。

ただ、それをどういうやり方でやるとこういういい効果ばかりが得られて、悪い効果は出ないかというのが非常に難しいところで、ある程度目に見える効果を出すためにはそれなりのスピードで速やかに SSBN を破壊していかないとだめなのではないかというような議論なんかもありました。

それでこのころ National Intelligence Estimate は、1985 年は、この辺の関係について次のように書いています。ソ連指導部は、戦争が遅かれ早かれ核にエスカレートすると認識している。このため、通常戦力によって早期にアメリカの戦域・海洋配備型の核兵器を破壊しようとしています。ソ連指導部は、SSBN のような戦略アセットの破壊だけで核へのエスカレーションが起こるとは考えていない。太平洋艦隊にあっても、大西洋艦隊と同様、戦略核任務を担う戦力は、ソ連軍の最高総司令部、Supreme Command の直接統制下にありましたということです。

そういう認識なので、そう簡単にエスカレートしないだろうということで、やりましょうみたいな話だったのですが、では実際 SSBN をやっつけるときにはどのようにやるかといいますと、基本的には一番理想的は攻撃型潜水艦、それがこれですね、Los Angeles class、当時出てきていた、要するに潜水艦をやっつける潜水艦、潜水艦だけではないですけども、基本的には潜水艦をやっつけるための潜水艦です。それに対潜哨戒機、P-3C とか、それから艦載の対潜ヘリとかを組み合わせて実施するのがベストということですね。

なぜかといいますと、SSN で魚雷を撃つと、結構何かアメリカの魚雷というのは音がうるさかったらしくて、それでばれちゃった。撃たなければ相手は見えないでこっちは見えているという状況で自分の位置を秘匿してできるのですけれども、撃ってしまったらもうばれますから、当然ぼごと音がしますから、それでばれてしまって自分がやられるリスクができる。しかも SSN は潜水艦は持っている魚雷の数とかにスペースが限られていますので、余り撃ってしまうとまた再装填するために帰らないといけなくなるということで、なるべく潜水艦の魚雷は使いたくないわけですね。ですから、潜水艦に先駆けて行かせて見つけさせて、あとは対潜哨戒機とか対潜ヘリとかあとは水上艦艇みたいのでやっつけるのがベストだということです。ただ、理想論はそうですけども、先ほど申し上げたように、そういうのをやらせないためにソ連は自分の近いところで有利なところで、自分のほうの戦力が濃密にあって、アメリカの戦力が薄いところでバスチョンをつくっていたわけですけども、それでさらに言うと、じゃバスチョンってどこら辺に本当はいたのかというと、かなりソ連のほうの近くにいたらしいです。これは昔、Dennis Blair さんに聞いた

のですけれども、どの辺にいたのですかと言ったら、ここですとは言ってくれませんでしたけれども、実際バスタージョンはこうですと絵にはなるけれども、かなりソ連の近くのほうにうろちょろしていることが多かったということのようです。

それで、対潜哨戒機、対潜ヘリを運用するためには AWACS を、海上索敵モードというのがあるのを私知りませんでしたけれども、それで使用して、ソ連の保有している対空ミサイル水上艦をさっさとやっつけて、空に対する対空脅威をなくしておいてからこういうヘリとか哨戒機を入れないと、対空能力が高いときはだめですから、そういうことをやる必要があるということになっているみたいです。

ただ、対 SSBN 戦略には当然批判がありまして、幾つかありますが、一番大きいものとしては、当たり前、誰でも思いつく話ですけれども、SSBN を攻撃すると核エスカレーションしてしまうのではないですかと、あるいはやられると思ったらソ連が先制攻撃に SSBN を使おうとしないのではないですかということ。これは、そういう批判をしていたのは John Measheimer という先生、国際政治学者、あと Barry Posen、MIT の国際政治学者、それから初期の Linton Brooks というのは、これは実は内部の批判者で、これが Robert Long さんですね、これですね、Linton Brooks さん。私も一回インタビューさせていただきましたが、彼は海軍のまさにこの海洋戦略をつくるプロセスに入っていた人です。だから内部からの批判者がいたということで、彼なんかはやはりエスカレーションするのではないかと、ああいった対 SSBN をやるのはいいけれども、それでエスカレーションした場合にそれでも核戦争を戦い抜くことができるのですか、海軍は本当にそこまでやる気はあるのですかと、そんなめっちゃくちゃなリスクをとる気が本気であるのならそういうたわけたことを言っていなくても、その覚悟がないのだったらちゃらちゃらそんなこと言うなよ、無責任だという批判をされていたようです。

ただ、これへの反論は、実はアメリカはソ連の SSBN の運用に関して非常に高度なインテリジェンス情報を持っていたと言われていまして、それによるとそう簡単に SSBN は使わないと、本当に最後までとっておくという運用の仕方をしていたということがわかっていたから、比較的安心して SSBN 攻撃ができたという話です。これは「deep penetration」という言い方をよくしますけれども、具体的には幾つか本当にやばいやり方で情報をとっておりまして、1 つは、「Blind Man's Bluff」という本があります。それに書いてありますけれども、1970 年代から実はアメリカがオホーツク海とバレンツ海に海底通信ケーブルがあるのを察知して、それをタッピングしてそこからチューチューと通信ラインをとって

いたらしいですね。それでかなり SSBN とか、要はなぜそんなものがあつたかという、これも誰もコンファームをされていないのでちょっと謎な部分がありますけれども、要はウラジオストクが主で、あとはもう 1 つがここのペトロパブロフスクだったわけですが、ペトロパブロフスクに司令部はないわけですね。こっちが主な司令部なので、こっちからここまでを通信しないとイケない。だけど、電波的に通信すると傍受されてしまうのでケーブルで、セキュアだと思ってケーブルをどこに敷いていたのか知らないけれども、ここを使って横断してどこかにつけていた。だけれども、何かの拍子で、そのケーブルがあるということがわかってそれをタッピングしていたということです。

あと、そういうのを盗聴していたのと同時に、盗聴していると相手が西側の動きに対してどう反応しているというのがわかるわけですね。よく話に出る 1984 年の Able Archer という非常に危険な核戦争になりそうになったと言われている演習があるわけですが、そのときも実はソ連側がどのように反応しているかというものの通信を傍受していたらしいのですが、思ったとおりにソ連がすぐに SSBN をバスチョンに移動させたのだけど、第 1 撃で SSBN は使用しないという態度をとっていたということがわかっていたようです。安心するまではいかないけれども、それなりの確信を持って SSBN をやっつけても大丈夫ということを考えていたと。

もう一つの反論は、アメリカも確かに SSBN をやっつけようとしていたけれども、ソ連だってアメリカの SSBN をやっつけようとしていたのだから同じじゃんという反論もあって、これ事実ですが、ただ、さらなる反論をするとすると、とはいっても、ソ連は能力が低かったから、アメリカの SSBN を攻撃しようとしても大してやれなかったろうから、結局両方やり始めたらもう一方的にソ連の SSBN がどんどんやられていって、アメリカのほうやられないということで、それはそれでソ連のほうからしてみれば何だそれということになっていたのではないかと思いますので、リスクがなかった、相手がやっていたからいいやというのは理論的にはそれは言える話だけれども、現実の能力差を見るとやはりちょっと難しいところもあったのではないかと思います。

それから逆の批判もあって、せっかくこういう能力を海軍は持っているのだから海軍はすごい役割ができるんだと、戦略核バランスに影響を与えられるのだとあって、もっと喧伝してちゃんと打ち出して、それは要は海軍の生き延びる生存戦略でもあるわけですが、組織としてももっとがが言ふべきではないかという逆の意見もあつたようですが、これもやはり逆の問題があつて、余り言うと、自分がどのぐらいわかっているかということのも

ばれてしまうので、リスクがあるというのも事実なので余り強く言うのも言えなかったということで、その辺は割合ちょっとぼやっとさせて議論していたということです。

さて最後に、ではこの対 SSBN 戦略はどのように評価されていたかといいますと、当時は非常に話題になっていて、対 SSBN 戦略というのはアメリカの海軍にとっての花形戦略みたいになっておりました。ただし、当然わかっている人はリスクが高いことは認識していますし、外からの批判はもうすごい、こんなものエスカレーションしてしまうに決まっているということで、かなり批判があった。特に民間の人はインテリジェンスがあるというのなんか知りませんから、そういうのがないという前提で言いますから、それはエスカレートするでしょうと言うわけですね。海軍としても、いやいやそれはこういうインテリジェンスがあるから大丈夫ですと言えないわけですよ、それは。そこは余りしっかり反論できないということで、ちょっと水かけ論ぽくなっていたということがありました。

ただ、今当時を振り返って、当時こういう議論していた担当者の人にインタビューとかをすると、割合口をそろえて言うのが、やろうとすればできる能力は持っていましたが、オプションとしてもちゃんと持っていましたが。ただ、最終的にはこれリスクがないとは言えない話だから、それは政治判断で大統領がやるかどうかというのは決める事柄だよねで終わるということです。

とはいえ、ですから実際は戦争が幸い起こらなかったのも、これが本当に使われていたのか、使われていなかったのか、あるいはどういう成果が出たのか、出なかったのかというのはわからないわけですね。ただ、わかりませんで終わってもちょっと能がないので、とはいえ、何かそれなりに評価する方法がないかなと考えて、今その研究の手法としてこれがいいのかどうか知りませんが、いろいろ考えてやっているものの一つは、アメリカがやっていたウォーゲームの結果を見るというやつです。

それで、ウォーゲームはそれなりにリアリスティックにやっているもので、アメリカ海軍は今からこれ当時やっていたウォーゲームの結果を見ると、それがすごいことに、結構誠実にやっているのです。結構失敗しているんです。だから、失敗するウォーゲームってすごい、それができているアメリカはやはりすごいなど。日本はそれできない、日本の自衛隊は。失敗して負けてしまって、これ自分のやっているのは全然だめになってしまうみたいなシナリオのウォーゲームは、やっているのかどうか知りませんが、日本的には余りできそうにない雰囲気、直感的には思いますが、それをやって、それで失敗も入っているということが結果に出ているので、割合客観的にやられていたのではないかと思うと、

それも多少の参考になるのではないかという前提でウォーゲームを見ますと、例えば 1979 年のグローバル・ウォーゲームというシリーズの中でやっていたのでは、アメリカがソ連の対 SSBN 攻撃をやり始めたら、それに報復をしてきて、ただそれは戦略核を使うとエスカレーションにはならないのだけど、大西洋、太平洋の両方でアメリカの空母に対して核攻撃をしたと、ゆえに 2 隻沈没させられましたということです。ソ連の目的は何だったかという、核戦力としての空母を破壊する、だから核をやられたから相手の核をやっつける。それからあと対 SSBN 作戦をやめろというメッセージを出すというための 2 つであったということです。ただ、逆に言えば、ソ連の核使用は空母に対する攻撃にとどまっていた、戦略核は使用せず、あるいは対地攻撃みたいなこともしないということです。

それはなぜかという、ソ連はそれをやり始めると本当に本土への核攻撃がエスカレートすることも、やられる可能性もあるので、本当に核というのを使うのは、アメリカが何かソ連の核に手をつけた場合にそれに対応する形だけで核を使用したということだったようです。

次に 1982 年のゲームでは、対 SSBN 戦略が有効かどうかについては議論が分かっていたということで、結局海軍にとってはあくまで一つのオプションにすぎないなど、中核的な戦略にはならないなみたいな結論になったということでした。

それからあと平時にも実際にこの SSBN 戦略ができるかどうかというのをテストしていたことがあったようでして、ある日、24 隻の——「two dozen」と書いてあったから本当にそんなに突入させていたのかなと思います、24 隻の SSN を、攻撃型潜水艦をソ連の SSBN に突入させたと。だけどソ連側に反応はなく、こちら側の SSN はどうやら発見されていないようであったという状態だったそうですから、そういうのを見ると、戦時ではないので、アラートレベルが低いからというのもあったろうけれども、そう簡単に発見されないということもテストを当然していたと。

他方、この対 SSBN 戦略あるいは海洋戦略がどのくらい成功したかしないかというのを評価するもう一つの手がかりとして、ソ連側の認識というのも見ればいいのではないかと考えておまして、ソ連側の認識というのも調べております。

そうすると、いろいろな人がいろいろなことを言っているので必ずしも一貫していませんが、大きいところでいうと評価としては、ソ連側が自分が冷戦で負けてしまったのは、海洋戦略や海軍力の増強でやられたというより、アメリカが戦艦を復活させたり戦術曳航ソナーシステムを導入したり、CIWS (Close In Weapon System) という近接防衛シ

システム、ガトリングガンみたいなやつですけれども、それとか A-6 という攻撃用の空母艦載機ですとか F/A-18 というのを改良してきたり、あとは何よりも AWACS とか F-15 から運用する ASAT、衛星攻撃兵器とか探索曳航アレイシステム等、要は潜水艦を探知するためのものですが、そういうものを次々に出されたので、もうそれでソ連の潜水艦が安全でなくなったという面のほうが問題だったという言い方がありました。

ソ連がやられた原因というのは、アメリカとの軍備競争に引っ張り込まれたということと、装備の量の充実のみにとらわれて、しょぼい武器をたくさんつくってメンテの負担ばかりふえて大変なことになったとかですね。ただ、海洋戦略はそんなに重要ではなかったという根拠の一つは、とはいえソ連が海軍に投じていた予算はしょせん大したことはないから海軍の軍拡はソ連の崩壊の原因ではありませんよとか、そういう言い方がよくあります。

あと核戦争についての、あるいは核使用についての見方ですが、これは以前、菊池さんが発表されたときちょっと議論になりましたけれども、ソ連のほうでも 1970 年代になるとだんだん核戦争は無理だよねという話が内部で出てきていて、核戦争にならないように通常戦で NATO に勝つ、西側に勝つということを追求するようになっていたようです。ソ連の総参謀本部では、1987 年ごろまでには SS-20 が相当配備されてきていたので、NATO の核使用を逆抑止しながら通常戦争を遂行することができるようになったと自信も生まれてきていたというようなオーラルヒストリーによる証言もありました。

ということで、アメリカとソ連のどちらがより核へのエスカレーションを軽減してきたのか。そういうのをいろいろ読んでみると、書いてあるものによって認識が微妙に異なっていて、みんな要は核エスカレーションしたら終わりだなという認識はそれなりに持っているのだけれども、せざるを得ないよねというのと同時に何かそういう認識もあって、その辺は本当に認識の問題なので、誰がどのぐらい本気で考えていたかというのは、はっきり確定するのは難しいなと思っております。

それから、ソ連のほうにしてみると、自分のほうのソ連の SSBN は音がうるさいから安全にパトロールもさせられないし、もし外に出して行ってアメリカの近くまで行くのだから物すごく時間がかかってしまうから、それから出ていこうとしたら対潜バリアといって、アメリカが基地の外で常に見張っているわけですよ、出ていくときに。それに絶対ひっかかるから追っかけられるということで、やばいと。それでどうしようもないから、彼らがおもしろい書き方をされていて、大陸間弾道ミサイル潜水艦をつくりましたと。だから基地から出ていかななくても打てる大陸間弾道ミサイル潜水艦をつくったけれども、でもこれ

をやったから今度は引きこもってやるしかなくなったから、機動力がなくなって、せっかく潜水艦に載せているのに何か固定したバスチョンの中でしか運用できないから、そこで見つけられたらアウトという結構ジレンマに陥っていたということです。まさにこのジレンマをアメリカ側は利用したということです。しかも、対潜監視能力はアメリカのほうがはるかに上でしたということでございます。

ソ連海軍が SSBN 中心になった理由というのは、海洋監視の未発達と地理的な制約からソ連指導部は本格的な海軍の建設に消極的であったというような話です。時間の関係もあって、ここで終わらせていただきます。

次に 2 つ目の、「『海洋戦略』におけるアメリカの核兵器の役割」ということで、さっきのはソ連の核戦略の変化をアメリカが通常戦力でどう対応戦略で利用しようとしたかという話ですけども、今度はアメリカが持っていた核をどのように戦域で運用しようとしていたかという話です。

このときは、基本的にはアメリカの戦域における核兵器の役割というのは、戦時におけるアメリカの空母に対する核兵器の使用を抑止するということにありました。実は、大きく見ても、1980 年代というのは米ソ両方の戦略においてこれを詳しく岩間先生に教えていただきたいですけども、私の認識では両方とも核戦争の役割というか、核戦争はやってはいかぬなという認識でなるべく通常戦で抑え込むという、通常戦で決着をつけるという方向で動いていて、核戦争の役割は低下していたと思います。ただ、核戦争の役割というか、その可能性とかシナリオにおける核戦争の重要性というのは下がりますが、核兵器の重要性は必ずしも下がらないですね。なぜかというと、核戦争にさせないためには要するに戦時核抑止力はがっちりしておかないといけないわけですから、それで SS-20 とか必要なわけですし、核つきトマホークとか。お互いにえらい目に遭うぞという状況をつくって核戦争にならないようにするために、より現実的に核が使える体制をつくるということだったのでないかと思います。ただ、いずれにせよ、核戦争というのはシナリオとして余り重要ではなくなっていった、「protracted conventional war」という言い方をよくしますが、通常戦の長期戦ということです。

さて、それでは当時太平洋戦域においてどんな軍事戦略だったかといいますと、実は 1970 年代までは、先ほど申し上げましたが、基本的にもう朝鮮半島有事一辺倒だったのです。太平洋司令部はもう朝鮮半島だけたっておけばいいですと、対ソ戦のときは関係ないから静かにして、早く重要な戦力を提供するだけにしなさいとなっていたのです。それが

1980年になると、それプラス対ソ戦のシナリオもようやくでき上がる。それからあと、対ソ戦の計画では核戦争中心のシナリオしかなかったものから通常戦争中心のシナリオに変化しましたということです。

これについて具体的な証言等を御紹介しておきますと、1977年にここは「Thomas」とちゃんと書いてありますが、Haywardが太平洋艦隊司令官に就任したときにアメリカの太平洋艦隊の戦争計画は専らSIOP（単一統合作戦計画）、要は核戦争をやるための計画ですけど、こればかりだったと。全然ソ連海軍に対してどうするかとか他の地政学的な問題にはほとんど取り組みがなくて、核しかやらないのは我々はみたいな感じで思ったということだったようです。

それから、1979年から太平洋軍のほうで司令官に就任したRobert Longも、就任してから太平洋軍に対ソ戦争計画が存在せずに朝鮮半島のみが対象になってくることを知って、ええっと思ったと。要は対ソ戦が関係ないというのがスイングされてしまうため、太平洋では戦略は必要なかったということです。

Longの回想、オーラルヒストリーを読んでいたらおもしろいものが出てきたのでここに書いてあるのですが、直接引用です。「Insofar as the services were concerned , most of the chiefs」というのは他の分、「really did not see any need for military forces in the Pacific other than if there was a Korean contingency . I remember discussing this with the Chief of Staff of the Air Force at the time , and he remarked , “Bob , as far as I’m concerned , the only reason that we provide air forces for the Pacific is for a Korean contingency .”」と言われて「To me , that was completely unrealistic .」と言っております。彼はこれで、いやそんな対ソ戦の計画がないってだめでしょうと言って、ちゃんと対ソ戦の計画をつくるというのに尽力しましたということです。

あとは核関連の情報は余りないので断片的になりますが、例えば1980年12月にはロングがPACOMに配備する核及び非核の巡航ミサイルのベストミックスの検討をJCSに要請したり、PACOM theater Nuclear Force Improvement Studyみたいなものをやっていたという記述がありました。

それから、もうちょっと高い政治レベルの文書を見ても、1981年に策定されたDefense Guidanceによると、NATO中心の局地紛争重視であったカーターの政策を変更して、直接引用ですが「aggressive , global defense capability that could carry the war to the Soviets at times and places of US choosing」というものに変更したと。これを見てロング

司令官は太平洋軍の重要性は高まるなど認識していたようですが、ただスイング戦略自体はそのまま延びていたのも、まだまだもう一頑張りという状況でした。

そしてロング司令官は、このころ太平洋軍としては早期の前方展開でソ連の極東戦力をエンゲージすべきだと主張して、これによって達成できる目標としては日韓両国をアクティブな同盟国として維持し、日韓の戦力と基地をアメリカとしても利用できるようにと維持し、また逆にいうと最低限でも日韓両国にある基地をソ連に使わせないという目標にすべきだというようなことを言っていました。これは先ほど言った **Sea Plan 2000** という、彼も **Sea Plan 2000** から関与していたので、そういう考えを太平洋軍司令官になってから実施しようとしたということです。

あと NSDD (National Security Decision Directive) 32 というのがあるのですが、これは 82 年にできたもので、それによると通常戦力による長期戦に必要な装備、弾薬、燃料補給の必要性を強調している。当時のような状況のままだと 30 日で通常弾薬が尽きてしまって、大統領が降伏するか核へのエスカレーションのどっちかしかないというチョイスを迫られるようになっていたので、そんなところがないようにするという目的でやっていたということのようです。

次 2 番目、6 ページ目に行きまして、「核兵器の位置づけ」ですが、海洋戦略の基本概念としては幾つかあって、米国と同盟国軍を有効活用する統合・連合戦略であると。2 目、基本的に通常戦力によって実施するもので、核戦力は核へのエスカレーションを防止するための手段です。長期戦を想定します。それから前方展開、高い即応性、ハイテクの使用を強調します。そして、これは海軍がつくったものですから海軍戦力の柔軟性と機動性を最大限に活用しますというような考え方になっております。

ここでも、**Global War Game** の内容を御紹介しますと、いろいろやった結果、やはり核兵器の使用というのはお互いにとって困難だなというのがわかりましたと書いてありまして、アメリカ側から見ると核兵器の使用の難しさというのは何があったかという、1 つは、まず戦域核戦力でソ連のほうがたくさん持っていたから、撃ち合いになると不利になる。2 つ目は、アメリカにとってソ連の核使用への有効な対抗手段がない。というのがなぜかといいますと、地政学的にすごく米ソが非対称だったのです。というのが、ソ連にとってはアメリカの空母とかグアムとかハワイとかいろいろな島に基地があるので、そういうところへやったら他に余り付随的被害なしに、カウンターフォースで敵の戦力だけをやっつけることができるわけですね。

ですが、それで対称的に反応したらアメリカは何ができるかという、空母がやられたらソ連の空母とかソ連の水上艦艇をやっつけますかということになるけど、ソ連の空母とか水上艦艇はアメリカのものに比べるとめっちゃしょぼいわけですよ。それをやったって全然アメリカとしては損で、対称的に反応したら損になって終わりということは、対称的にやらないというのは何を意味しますかという、地上目標とかより重要なものをやっつけないといけないので、ソ連のほうの重要な目標はほぼ地上にあるわけです。そうすると、あたかもアメリカが地上に核を使ったというすごくエスカレーションを起こすということアメリカ側がやることになりから、これは非常に政治的にも軍事的にも敷居が高いと。そういうことを地上目標にやり始めると、それがまた戦略核へのエスカレーションを引き起こすきっかけになるということで、非常に怖いなということで使いにくい。

ソ連側に立っても難しいという面があって、なぜかというソ連は通常戦力の優位を築くためすごく頑張っていて、ワルシャワ条約機構とかすごい兵力を持っていたわけだけど、それを下手に戦域核使用にエスカレートしてしまうと、それがちゃらになってしまう。せっかく投資していたところが違うゲームになってしまったら、その通常戦力の世界における優位というのがちゃらになってしまうから意味がありませんということがありますし、核へエスカレーションすると、アメリカ側の懸念の逆ですけれども、ソ連本土がやられるリスクというのが高まるから、ソ連にとってもおいしくないということで、なかなか核兵器の使用というのは当たり前ですけど困難だなと。戦域核の使用というのはお互いに厳しかったということです。

それからあと断片的ですが、1982年に出てきたディフェンスガイドラインによると、それに添付メモランダムというのがあったらしくて、それに何が書いてあったかという、核抑止というのを海軍の作戦にも拡大適用して高価な空母戦闘群（CVBG）を守る政策に転換しますと。それ以前は、海洋で始まった核戦争は地上に拡大されないという政策であったとの消息筋の、これはリチャード・ハロランさんが書いた新聞記事ですけれども、そういうものだったようです。具体的にそのメモランダムの内容を直訳したのがこの下に書いてありますが、海洋におけるソ連の核攻撃によって始まった核戦争は必ずしも海洋に限定され続けるわけではないというのが米国の政策となると。海上でソ連が核使用した場合でも、米海軍の保有する戦域核兵器によってソ連の艦隊が失われるというだけでは、ソ連に海上における核攻撃を抑止するには十分でないかもしれないので、ソ連領土内のものを含むソ連にとって死活的な重要目標をも攻撃対象とするということ、ディフェンスガイ

ドラインそのものではなくて添付されたワインバーガーの署名のついているメモランダムというのがどのぐらいの重要性を持つのか、これも今度インタビューをしますが、そういうことがあったようです。

あと研究課題としては、NSDD13 ですね、“National Security Decision Directive Number 13 : Nuclear Weapons Employment Policy”というのがあったのですが、これとの関連性というのがどうなっていたのかなというのはまだ調べがついていないので、もしどなたか御存じでしたらちょっといただきたいのですが、そういうことです。これなんかはかなり核戦争遂行戦略みたいな割合積極的なあれですけども、私の認識では核戦争を遂行できるような体制をつくることによって逆に核戦争にエスカレートしなくするという考え方が基本的にそうだったのではないかと思いますが、そういうのを含めて。

レーガンが *A nuclear war cannot be won and must never be fought* と言ったのは 1984 年ですが、そのころに一部核戦争勝利戦略みたいなものを、核戦争を戦って勝てるのだというようなことを言っている人が多少いたので、レーガンがそういう言い方をしたところで一応決着はついたということになっているのですが、軍事戦略のほうでも私はそういう流れだったのではないかなと思っております。

それからあと、核戦争はやはりだめだなという傍証として、1983 年に *Proud Prophet* というウォーゲームが *National War College* であったということで、そこはワインバーガーやベッシー統参議長も参加した非常に現実的なグローバル・ウォーゲームだったということですが、これを 2 週間にわたって実施してやってみたところ、アメリカがソ連に敗北を受け入れさせようとして限定的に核を使用したらソ連が撃ち返してきて 5 億人死にましたというめちゃくちゃな。これを見たらやはりだめねということになったということのようです。

それからあと 1984~1988 年の、これは *Naval War College* でやった *Global War Games* というシリーズが *Naval War College* ですが、この前期のやつとこれが後期のあれですけど、そこではソ連の役をしたレッドチームの人たちがソ連の立場として太平洋においてアメリカの空母に核攻撃をかける価値がどうだろうというのをかなりちゃんと検討してみました。そのときの議論の内容は次のようなもので、割合やってもいいんじゃないかみたいな話だったようですが、アメリカや NATO の国土への攻撃ではないのでエスカレーションは起こらないし、また太平洋におけるアメリカの通常戦力による攻撃を著しく減少させることができると。核を使ったら日本がびびり上がって中立化させることができるかもし

れない。また、中国に対しても、中国は当時アメリカのほうの味方でしたから、強いメッセージを送り参戦を思いとどまらせることができる。そして最後に、アメリカにとって太平洋戦域には対称的な報復目標がないために、ヨーロッパ戦域あるいはソ連本土に対して核を使用するか、あるいはソ連本土に対して核を使用せざるを得なくなる。だけど、そんなことをやったら国際世論はアメリカのエスカレーションを非難することになり、NATOは瓦解して仲たがいでぐちゃぐちゃになってソ連に有利な条件で戦争終結に結びつけられるかもしれないということです。そういう議論はあったということですが、ゲーム自体は核攻撃はたしかエスカレートしていなかったと思います。

それから次、他方ソ連側が常に心配していることは、通常戦で勝ったらベストなわけですね、SS-20とかで核にエスカレーションしないように。ですが、通常戦が成功し過ぎるとNATOがもう核使用せざるを得ないということになって逆にエスカートを誘発してしまうということをソ連側は常に心配していました。ただし、ソ連側としてはライン川まで越えてもNATOが核を使用しなければ、もうここまで来て核を使用したら自滅だから大丈夫だろうという安心する傾向はあったというような、レッドチームはそういう計算をしていたという結果が出たようです。

それから、アメリカのジレンマも明らかになっていて、アメリカが長期の通常戦と想定していますが、それで成功すると今度はソ連としては核使用にエスカレーションせざるを得なくなるからエスカレーションする可能性が逆に高まる。それからあと、アメリカによる核の第一使用というのはソ連の核使用を招き、他の戦域におけるアメリカの優位を相殺するし、海洋における優位も失われるリスクがあり、また日本の中立化につながるリスクもありますということで、これはアメリカとソ連のマインドセットというか計算というのは本当に対称的でミラーイメージというか、相手の優位と自分の不利というのが割合、アメリカ人が実際やっているわけですから似たように考えているということかもしれませんけれども、それなりにかみ合った議論になっているなど、お互いになかなか難しいということ認識していたということになります。

こういういろいろな議論を踏まえて、「Maritime Strategy」というのは実はドキュメントとしては82年のプレゼンテーションマテリアル、84年に出た改訂版、それから85年に出たのかな、それからちょっと忘れちゃったけど87と88かな、そういう感じで出ているのですが、発展してきた88年～89年版というやつを見ますと次のような記述があって、「ソ連の文献、演習、ドクトリンは陸上で核戦争が始まらない限り海上では核兵器を使用

しないことを示している。」と書いてあるのです。こういうアセスメントに変わったというか、こういうアセスメントを **Maritime Strategy** でぼんと書いてあるというのは何でこのようにはっきり言っているのだろうかというのがよくわからないので、これは僕も調べたいと思います。

それから次に、「戦域核戦争における海軍の核心的価値は、使用可能な空母搭載核攻撃力及び核搭載のトマホーク対地攻撃巡航ミサイル (TLAM/N) を初めとする、信頼性の高い対地核攻撃能力を保有しているところにある。もし陸上で戦域核戦争が始まった場合、ソ連の側面 (flank) に位置する核・非核両用の海軍戦力が地上戦を支援する形で敵の目標を前方から攻撃することができる。したがって、我々——我々というのはネイビーですね、米海軍の生存性の高い柔軟な戦域核攻撃戦力を前方展開することによってソ連の計画にさらなる不確実性を強要し、抑止力を強化することができる。海洋配備の核兵器は究極の機動力を持つシステムであると考えられることができる。」「我々の海洋配備戦力は複数の方向 (axes) から、ソ連の深い位置にある新たな目標を攻撃することができる。」というようなことに核関係の記述としては最終的な、冷戦期末期の最終版とも言えるようなものではないかという記述になっています。

こちらのほうの評価ですが、基本的に繰り返しですけれども、核攻撃能力を維持することでソ連の海上における核使用を阻止するという政策がとられていて、これによってソ連の核へのエスカレーションというのはかなり抑止されると考えられる状況をつくるのに成功したのかなど、この **Maritime Strategy** の記述を見るとですね。

ソ連は、核使用を専ら直接的な報復の手段としてのみ用いるのではないかと考えられていたけれども、対 **SSBN** 攻撃をやった場合はアメリカの空母が報復を受けるというのはやはり有力なシナリオだったのだろうなど。これは非常にリーズナブルな、対 **SSBN** をやられたらアメリカの空母をやっつけるというのは結構リーズナブルな対応だと思いますので、このシナリオというのは割合現実的だったなど、この対応というのはすごくすくとんて来るので、現実的に心配すべきシナリオだったのだと思います。

なんだかんだあるのですけれども、いろいろあって、トマホークの配備というのはやはり非常に重要で、これによってソ連の指揮所やレーダー関連施設を破壊して、その後空母艦載機で本格的な経空攻撃を実施することが可能になりましたみたいな記述もありました。

ということでいろいろあって、平和が続いて幸いであつたおかげで正解というのがわからないのは学者としては残念ですが、人間としては非常にハッピーです。この辺は隔靴搔

痒で、こういう考え方もあった、ああいう考え方もあったで、最終的にはいろいろな人の頭の中のパーセプションの世界で議論は終わってしまったわけですが、こういうところから当時の状況というのも、今回の Nuclear Posture Review に結構、ロシアとか中国に対するピアコンペティターとの間の核戦略あるいは核戦力のあり方が注目されてきた今、当時の戦略、その後も現在のインプリケーションもある、そして学問的にもなかなか刺激される内容になっているという印象を持っております。

以上でございます。

○岩間氏 ありがとうございます。結構すごい量の情報が入ってきたと思いますので、5分ほど休憩を挟んで Q&A セッションに移りたいと思います。

(休 憩)

○岩間氏 それでは、ふだんとかなり傾向の違うお話なのですが。

○道下氏 岩間先生っぽく味つけしてみたのですが。

○岩間氏 ああ、そうですか。Q&A に移りたいと思いますので、どなたからでもどうぞ。所属とお名前をお願いいたします。

○村野氏 御報告、ありがとうございます。岡崎研究所の村野と申します。

私は、現代の核戦略とアメリカの核戦略のフォローをしているのですが、最後に道下先生がお話しになられた冷戦期の海洋戦略における核兵器の役割と今日の核戦略における海洋法のインプリケーションというのを伺いできればと思います。

少しだけ、私が、最近出た NPR 2018 の気づきの点といいますか、既に御承知のとおり、今回の NPR では、どういふのを捉えると新しく TLAM-N に準ずるといふか、TLAM-N とは書いてないですが、新たに sea-based の SLCM を開発するというところで、余計アメリカの核戦略の軸というのが水中ベースのほうに移ってきていると思うのです。その中で、SLCM の場合はある程度射程の制限もありますし、SLBM にしても即時性をより発揮するためにはなるべく近い位置から発射したほうが有利だといふのがあって、その分、冷戦期と同じように、今度はアメリカ側が自分たちの潜水艦を守るために ASW を例えば西太平洋の海域でやる必要があると思うので、それが同盟国である日本の役割もそこに大きくかかわってくるのかなと私は考えているのですが、その点、何かお気づきの点というのがありましたら伺いできればと思います。

○道下氏 非常に的を射た御質問ありがとうございます。私も、お持ちのとりの認識でございまして、どんな感じの運用になるのかまだわからないので、何とも今の時点では言えないところもあるのですけれども、アメリカの知り合いのカーネギーの核の専門家なんかと話していると、私の認識では SLBM から発射するのをタクティカルに使うというのは危な過ぎて、そんなむちゃくちゃな話はないのではないかと感じていたのです。

なぜそんな危ないかという、要は戦略核兵器と区別がつかないわけですよ。そんなものを例えば北朝鮮に撃つと云って、それは軌道計算すればわかるのだけど、相当怖いですよ。Launch-on-warning だったら、撃つて自分のほうに、中国とかソ連の方向に飛んでいったりするわけですから、そういうのもちゃんとアメリカも考えて撃つでしょうけど、かなり怖いのではないかなと思っていて、なので、SLBM なんかを北に使うわけないよねという感じで彼に話していたら、いやいや SLBM は使うよみたいな感じで言っていて、アメリカの核の専門家の感覚ってそんなものかと思って驚いたのです。

そういう会話をしていたので、今回 Low-Yield の SLBM に載せると言ってもそんな驚かなくて、使う気満々なんだというのがわかっていたから、それでこう来ても不思議ではないなと思ったのですが、そこはテクニカルな話なので、怖くない、そんなことしてもいいのというような、ちょっと私は不安だったのですけれども、大丈夫ならいいだろうけど。北朝鮮の、例えば核実験場とかはロシアにも近いし、中国にも近いところで、そんなものを、確かにロケットが燃え尽きたって MIRV 化されていたらそこからまた起動できるわけだから、そんなものを撃つて大丈夫なのかなというのと、中国とかロシアが相当びびって大国間のリスク管理とか危機管理上、私はよろしくないのではないかなと思うのですが、ただ、おっしゃるとおりで、弾道ミサイルを使うというのはスピードの問題があって、スピードが速くないと困るという状況が出てきているので、それは戦術的には合理的なのだろうけど、使い方は工夫する必要があるなと思っております。

それとちょっと話はずれるのですが、核ではないのだけれども、通常戦力の面で基本的に北に対しては通常戦力でできるだけ早期の先制、韓国とアメリカはもう完全に先制攻撃をやるつもりですから、予防攻撃をやるつもりはないけど、北が何か悪さをしようとしたら先制攻撃するとなっていて、我々はい北のミサイルにばかり目が行くのですが、韓国も実はすごく頑張っていて、既に巡航ミサイルと弾道ミサイルを合わせて 1,000 発以上持っているのです。さらに今後、弾道ミサイルをもっともっと玄武の玄武（ヒョンム）-2 というのがありますが、それをもっともっと増強しようという方向でやってい

まして、何でそういう方向で行っているかという、やはりスピードが必要だからなのです。そういう意味では、SLBMをおっしゃるとおりで近くまで持って行って、近くでぱつと撃つ、それで地上配備のやつも組み合わせればばばぱつと、その辺になるともう数の勝負になってくるので、北朝鮮にも破壊したいターゲットが山ほどあるので1,000発では足りないからもっとやりますと言っているわけですから、もう全ての戦力をその辺に集結させて、近くからばばぱつと撃ち込んでやってしまうという感覚なのだろうと思うのです。

そういう意味ではおっしゃるとおりで、近くから運用すればそんな遠くまで飛ばなかったら、遠くに上がったならMIRVもいろいろなところに行けてしまうかもしれないけど、近くを撃つのだったら確かにそんなに変なほうに行きようがないから、そのように撃てば中国やロシアもそんな心配しないのかなと。ただ、ここは技術的な話なので専門家に聞いていただいたほうが良いと。

それに伴って西太平洋でのASWという話ですけど、これは私は余り必要ないのではないかなと思っておりまして、なぜかというところ——当面はですよ。というのが、少なくとも北朝鮮相手だとまずASWはしないと、絶対見つからないから大丈夫というのがあるし、それから中国だってそう簡単にアメリカの潜水艦を見つけないと思うのです、まだ。もちろん重要だけれども、アメリカで潜水艦を守るためのASWというよりはまだまだ相手を見つけてやっつけるという攻撃的なASWのほうが重要性が高く、そういう意味でこの間、出雲を南シナ海に持っていったじゃないですか。ああいうのは相当インパクトがあって、メッセージ性もあったと思うのです。要はSSBNを海南島で運用している。あそこに出雲を持って行って、あれはもうASWの中枢艦なわけですから。それを持っていったら、向こうのSSBNを運用している人たちはかなりびびるというか、腹が立っていたと思いますね。なので、当面はそういう運用をしつつ、でも将来より中国の索敵能力が上がってきたらアメリカの艦を守るというような話も出てくるかなと思いますけれども、当面はこっちのほうが攻撃的なポジションにあるのかなと思います。

○笹島氏 跡見学園女子大学の笹島と申します。

きょうのお話で、想定されているのは、ヨーロッパ正面に対してアジア正面における対応テクですが、太平洋正面においては第二戦線としてアメリカ軍側がそれを開戦するかどうかというところがポイントなのだろうと思いますけれども、きょうのお話ですと、太平洋正面で独自に開戦ということがあり得るのか。ヨーロッパ正面において何らかの形で米ソの間での紛争、エスカレーションがあり、それに対応してアメリカ側が第一戦線を開

くという形を想定していらっしゃるのでしょうか。もし、太平洋正面において第二戦線が開かれるとしたら、その残骸はどこにあるとお考えでしょうか。その辺は今回の研究の成果でわかってきたことがあるかどうかという点をひとつお尋ねしたいのと。

もう一つは、きょうのお話はオホーツク海を戦域とした場合のアメリカ軍側の対応ということで研究成果をお示しになったと思いますが、ウラ（高麗？）半島におけるソ連側の SLBM 基地に対しては、アメリカ海軍はどういう対応をしようとしていたか。そのところを総合的に見るとどのようなアメリカ海軍の戦略というのが見えてくるのでしょうか。そこを教えていただきたいと思います。

○道下氏 ありがとうございます。まず第 1 番目ですが、基本的にはヨーロッパ正面で戦争が発生した場合に太平洋正面でも第二戦線を開くという形になるのか。当然、ソ連だって向こうでやり始めたらこっちだってやられると想定して動くでしょうから、それは早期にこっちも当然アメリカの基地に攻撃をかけることになりまして、日本に対しても脅かして日本を中立化させるために。先ほど御紹介した **Global War Games** の一つでは、これもかなり極端なシナリオで 1 回しか出てこないシナリオですけど、ソ連が日本の近くで、空中で核爆弾を爆発させて脅して、おまえはアメリカに協力したら死ぬぞと言うというシナリオがあるんですけど、ソ連としては日本を中立化したいということでやってくると思います。

ヨーロッパ正面で戦争が起こったら、こっちでも事実上起こらざるを得ないという、それに近いものはあると思います。ただ、ヨーロッパ正面では基本的にアメリカそして NATO を含む NATO 側が守勢にあったわけですね、弱い立場にあったのに対し、極東正面では基本的にアメリカ側が攻めでソ連側が守りにあったということは大きいと思います。だからこそこっちで脅すということをやっていたわけですし、ですから、そこはちょっと日本のイメージとはかなり、日本人が何となく一般の方々が持たれているイメージとは違って、一般のディスコースはアメリカの海洋戦略に協力するために 3 海峡封鎖とか地位連合をやったわけですけど、やはり日本が脅威にさらされているからやるというストーリーをつくらざるを得なかったから、あたかも旧ソ連がすごく攻撃的なことをやり始めてきたみたいなイメージづくりをしたので、ソ連が脅威だったと思い込んでしまっているけど、実はこっちの正面ではソ連はやられる側だったわけですね。もちろん **SSBN** というのはアメリカを攻撃するのだから、すごいやりを配備していたというのがありますけど、そのやりは別に日本に向かっているわけではないし、直接の脅威ではなかった。だからこそ

中立化されるおそれというのがすごくあったわけですね。なので、アメリカは日本を中立化させないためにどうするかというのを一生懸命考えていて、Global War Games にも、日本を中立化させられそうになるのです、毎回。ソ連に怒られて、おまえアメリカはそんな手伝わないと言っただろうと言われて怒られて、はいはいと言って、だけどアメリカの空母とかがちょっと攻撃を受けて破損して、今から大阪港と東京、横須賀に入ってくるから修理よろしくと言ったら、ああやりますと言ってしまってまたソ連に怒られてみたいな、そういうシナリオなのです。そういう状況でした。

それから、大西洋正面での対 SSBN 作戦というのはどうだったかという、まさに全く同じことをやっておりました。太平洋正面では、実はアメリカだけではなくてイギリスも一緒になってやっていて、日本と似たような役割を果たしていたのがノルウェーです。ノルウェー海軍というのは、まさに日本がこっち側で果たしていたような、似たような役割を果たしておりまして、おもしろいですね、そうなったのは。その点、余り詳しくノルウェーの人と話したことはないですけども、そういうことです。ですから本当にそっくりで、そういうことで「ノルディック・アナロジー」というのを昔書いた西村繁樹さんという方が陸上自衛官でいらっしゃって、その方は、あっちでやっていることとこっちでやっていることは同じだなんて言って、ノルディックのあっちのほうでやっているのとばこつと反対にしたら同じことですよというのを説明したのですが、まさに西村さんのおっしゃるとおりの状況であります。

そのときにどういうオペレーションをしていたかというのが、最近出た本で『ディープサイレント』という本があって、これは二人のジャーナリストの方が書いているのですが、イギリスのオペレーションが書いてあります。イギリスの潜水艦オペレーション、これが今のところ、私にはわかりませんが、専門家に言わせると一番正確で深掘りしてある。それを見ると、本当に SSBN とかソ連のを追いかけて回してついて行って、けどばれずに帰ってきましたというのが延々と淡々と描いてあるのです。アメリカ海軍の当時やっていた人に聞くと、これを読めと。これを読んだら、これはイギリスがやっていたことだけど大体こんなものだから、アメリカが何をやっていたか想像がつくでしょうという言い方をされますので、かなり具体的な動きというのも部分的に出てきているという状況でございます。

こっちでそこまで深掘りして書かれたものがあるかというとなないので、私もそこはあの本までのように細かいオペレーションは書けないし書かないですけども、いろいろな方

にインタビューをした結果から、どこでオペレーションするとかそのぐらいは書けると思いますので、そのぐらいは書いていきたいと思っております。

○岩間氏 次、古川さん。

○古川氏 大変興味深い発表、ありがとうございます。

ソ連の80年代のこのバスチョン戦略における進化というのが実行によって、結局中曽根政権の不沈空母発言から始まる日米同盟の強化とか海上自衛隊の活動の強化というのはどのような影響をソ連側の認識に与えていたのか、何かもし情報があれば。

○道下氏 ありがとうございます。実は、日本の自衛隊もこの海洋戦略の中で非常に重要な役割を果たしていますし、当時政策をつくっていた自衛官の方も海洋戦略と言ったらあれねと言って、よく予算とりのために使いましたみたいな話で、あれがあつてすごくとりやすかったですみたいな話ですが、ただ、どのぐらいいの海洋戦略というのを当時の日本の安全保障の専門家あるいは政策担当者が理解して、その中の位置づけというのを理解してやっていたかという、これは結構疑問で、ただ、西村繁樹さんなんかはそれがわかっていたと思うのだけれども、どのぐらいい全体像が見えていた人がいるかというのはちょっとわからないところがあります。

ただ、知ってか知らずかやっていたのです。日本がやっていたのは、ただ、対SSBN作戦は余り日本は関係なかったですね。関与していませんでした。これはいろいろな理由があるのでしょうけれども、米ソの核戦力の話というのは日本とか要はチンピラは関係ないので。これは本当にもう一番上の上の重要な戦いの場なので、それはもう彼らの一線級の人たちだけが精鋭を集めてやっていたということだと思います。日本が唯一関連があつたと言えるのであれば、何かちょっとオペレーションとめておいてみたいな話がアメリカから入ってきて、そういうのが入ってきたときに、多分SSNがオホーツク海とか何かに入っていくから邪魔にならないように止まっておけよということなのだろうと想像するぐらいいな話で、実際にそれに直接関与していたわけではないという話ですが、本当のことは何かあつたか知りませんが。私は、直接その攻撃作戦には入っていく能力もないし、必要もなかったかなと思います。

それから核のほうも、これは日本としてはアメリカの空母、機動部隊を守るというのが一番重要な役割だったので、それをやる中でソ連のバックファイアにやられないように守るということとかSSGNとか核を搭載したミサイルを空母機動部隊に撃たれないようにそういうやつをやっつけるというのはやっていたので、部分的になっていたというところは

あると思います。核が入ってくると直接的に日本が関与するということは余りなくなってきて、ここは核が絡むと本当に大リーグの世界になってしまうので、そこは米ソでやるという感じだったのだと思います。

○河村氏 割り込んですみません。防衛省の河村と申します。

SSBN に対する作戦で日本側が係わる余地があるというのは、実際に攻撃する段だけではなくて捜索のレベルでもということ。

○道下氏 そこはもうオホーツク海に入ってしまったので、そこで水上艦艇を出すわけにもいかず P3C を、だからアメリカがもう制空権もとってしまっていてきれいになってしまっていて、P3C とかが入っていけるようになったら入れていたかもしれません。ただ、そうならない状態に入っていくことはないので、基本的には SSN だけで入っていきますし、日本のはディーゼル潜水艦しかないから、オホーツク海に入っていって何か索敵するというのは多分できないので、本当に相当戦争が進んでいって、もうソ連のほうがすごくやっつけられて制空権もなければ ASW 能力も、海上でも航空でももうこっちが優勢というか支配権を握った状態だったら日本の P3C だって対潜ヘリだって ASW 用の海上艦艇だって入っていったわけですから、それは相当運用された可能性はあるかもしれませんが、そこまで一方的な勝負になったかなというのはちょっとどうなのだろうな。

でも、先ほど申し上げたとおり、理想のやり方は SSN とヘリとか哨戒機でやるというのがベストだと。でもどうなのだろう、僕はちょっと感覚としてソ連の核戦力ですよね。しかも虎の子の虎の子の SSBN の作戦に日本を入れるかなというのが余り想定できないのではないのではないのでしょうかね。こっちだってちょっとそこは勘弁してくださいというようになるのだと思いますよ、やはり。SSBN に日本が手を出すという話になるとちょっとそれはただで済まない世界になるかなという気はします。ただ、そこは証拠がないので今後の研究の課題とはしたいと。

それから、先ほど古川さんの御質問にもう一つつけ加えたいのですが、日本の評価はどうだったかというので、実は冷戦後に海洋戦略はどうだったのですか、どんな評価だったのですかというのをソ連側に聞いた人がいて、その人の話によると空母は怖がっていたと。それから、ソ連が一番びびったのは、アメリカの空母、機動部隊が同盟国軍と一緒にあって束になってかかってきたらもうこれはすごい脅威だったという見方を結構して、昔の太平洋艦隊司令官だったようなおじちゃんたちが、海上自衛隊はすごかったというのを結構強調していたということです。

○小川氏 防衛大学の小川です。どうもありがとうございました。

先ほど来ヨーロッパとアジアの連関性という話があるのですけれども、その時期、80年代のアメリカでヨーロッパとアジアが喧嘩にならないような中で核をどう使うかというのは、そういう戦略の想定というのがあったのかというのが1つの質問です。

もう一つは、アジアの場合には海洋とか海軍とかになると思うのですけれども、Global War Gamesのやつを聞いていますと、海上の戦略というのは陸上と違って稼働率というか潜水艦というのも持っているものが全て出られるわけではないですから、その分を考える必要があると思うのですけれども、アメリカの考えは稼働率を抜きに考えているようなイメージが起きたのですけれども、特に稼働率を考えれば、稼働率はアメリカは高いですから、その辺でもアメリカが有利になるなど考えるのですけれども、その点はどのように考えておられますか。

○道下氏 2つ目のところですが、稼働率はもちろんアメリカは考えていて、そういうのも含めてソ連側はやはりもうかなわないと思っていたと思いますけれども、ただ、ソ連に有利な点もあって、というのが、ソ連側が先に戦争しかけていたはずなのです、やるとしたら。そうしたら自分がいつ戦争するかというのがわかっているわけですから、そのときにマキシマムになるように当然、でもこっちもそのように何か運用がおかしいというのに気づいて、何だこれはというくらい高い率で整備しているなどか思ったら、何か変なことをやろうとしているのではないかとこちらを感じたかもしれませんけれども、一応攻め側なので向こうが稼働率を最大にして、こちらは必ずしも平時のオペレーションをしているので余りそのようにならないという点はあったと思うので、その辺は、その計算は私はやったことないのですけれども、そこまで一方的に、ソ連の稼働率は平時は確かにすごく低いですけど、ソ連の艦隊も地上軍もカテゴリーのA・B・Cもありましたし、だけど、それは平時だからそうなっているわけで、戦時には攻め側なのでせいの出てみんな稼働させればいいので、そこはソ連側に必ずしも不利だったとは言えないと思います。

1個目の御質問は、誰の誰に対する核使用ですか。

○小川氏 Global War Simulation で、要はアジアとの戦争でもグローバルなほうになるというような想定という。

○道下氏 いや、それは逆で、ヨーロッパの戦争がアジアに当然飛び火してくるという想定です。

○小川氏 はい。それで、たしか以前、西村先生のおっしゃる中では、一般的には日本に

も冷戦期には波及してくるというような話でしたけれども、西村先生はヨーロッパから波及するだけでなく、アジアのみの戦域だという話をされていたように覚えているのですけれども。

○道下氏　そうですかね。西村さんはむしろそうではないと言っているほうの人だったと思います。一般的には日本のほうは、政治レベルで、日本防衛として個別的自衛権の世界で専守防衛の世界で説明しないとイケなかったもので、だから、その辺はもうかなりインチキ議論をつくっていたわけですね。

○小川氏　はい。

○道下氏　その中では、日本が単独で攻められるというシナリオは当然やっていましたし、作戦計画の 5051 だってそうですし、現実にやっていますけど、それは我々が 5051 をつくったとき、正直アメリカとしては、何ばかな無駄な作業をさせるんだみたいな話で、そんなものまず可能性ないという。ただ、それなりに意義を見出す人というのは、非現実的な作戦計画だけど政治的にはそれしかなかったから仕方なかったというのもあるし、非現実だけでも、ちゃんと作戦計画をつくったらいろいろなサブルーチンみたいなものができるわけですね。それは別に戦争がそのシナリオどおりにならなくたって、それを個々のあれをつくっておいたら、それを援用できるわけですから、あの作業は非常に重要だったと。

当時 5051 をつくったときに主導したのは西元徹也さん、元統幕長、彼が中心となって作業されたのですけれども、彼なんかはそういうことをおっしゃっていて、私もそれはそれとおおりだと思います。ただ、アジア戦域だけでというのは、あくまで日本のロジックに合わせる政治的な必要性に合わせるための作業であって、現実的には誰もそんなことは想定してなかったし、日本人だってまともな判断力がある人はそういうことは思っていなかったと思います。だから、想定は日本だけが攻撃されるですけど、本当は全く逆で、アメリカだけが攻撃されて日本はアメリカに協力さえしなければ攻撃しないで許してやるから協力すると言われていたはずなのです。ただそれを言ってしまうと、それではアメリカに巻き込まれてしまうのではないかという批判をされるから、そういう言い方ができなかったのへんてこな話にしていただけで。

ただ、それを正論で戦略的なロジックを組み立てると、そうはいってもそうやってソ連の甘言に乗ってそこで中立化されてしまうと、結局アメリカが負けたらソ連の、改めて後になってゆっくり料理されるだけだから、それに乗るべきではないという話もあろうし、それから巻き込まれるリスクはあっても、もとはいえ、米ソの大戦争という可能性はもう

限りなく低かったのだから、コミットすることによって巻き込まれる可能性はほぼないし、しかも、そうやってコミットすることによって対ソ抑止力がきくわけだから、そもそも戦争が発生する可能性も低まるから、日本の安全保障にも役に立つのだというロジックは、それは久保卓也さんなんかもそういうロジックは理解されてそういうことをしゃべっていらっしゃいますので、そこはそういう認識だったのだと思います。

○合六氏 二松学舎大学の合六です。このプロジェクトのメンバーをさせてもらっています。

コメントと質問ですけど、コメントがきょうの発表は僕がずっとしたかったことをお話しただいて大変ありがたかった。つまりさっきも出ていましたノルディック・アナロジーではないですけど、現在のロシアのバレンツとかバルトでの動きというので、ヨーロッパ側での 80 年代のヨーロッパの話振り返ろうみたいな動きがあったので。

○道下氏 ああ、そうですか。

○合六氏 まさに先生が太平洋側をやっているような形で、現在のヨーロッパ側はバルト、バレンツというところで、まさに今ノルウェーがすごく重要な、NATO の中でも見直されているというか、というのがあったので、やりたいなと思いつつなかなか手が回らない中で、まず太平洋ってどうなっていたのだろうというところをきょうは知ることができてよかったです。

同じような現代的なインプリケーションとしては、最近よく言われている、中国でも言われているのかもしれないですけど、ロシアで言うエスカレーション・トゥー・キーエスカレーション、つまりエスカレーションさせないために早期の段階での核使用の脅しですかね、使うというのが、何かこのあたりでも実際核戦争はしないのだけれども、その決意というものを示すことによって通常戦力レベルで何とか持ち越したいというような議論というのは、そういうところでもこの 80 年代と現在はパラレルな話ができるのかなというのが感想の 2 つ目。

感想が続いて申しわけないですけど、6 ページの 79~83 の Global War Games、この資料というか、アメリカ側の演習か何かですか。

○道下氏 これは、アメリカの Naval War College でやったもので、Naval War College Press かな、そこでレポートが出ています。

○合六氏 前、紹介されていたやつですか、ソ連の、菊池先生が発表された、あれとは…

○道下氏 あれは BDM Federal がやった、シンクタンクがやった聞き取り、オーラルヒストリーですけど、そうではなくて、これはグーグルをたどっていただければわかります。

「Naval War College」とやって、「Global War Games」か「Game」かで、たどっていただければ出てくると思います。

○合六氏 非常に自分の研究に示唆があるところで、まさに SS-20 が配備されて、それに対抗する形で NATO が二重決定でパーシングと GLCM を配備するといったときに、いわゆる GLCM なのか LCM なのか SLCM なのかとずっと NATO 内で議論しているのです。最終的に ground launched とするわけです。普通は脆弱だからポリティカルコストとしてはヨーロッパは GLCM は嫌なのです。そこでずっとやっている議論というのは、あえて脆弱にすること、ターゲットにされることによってデカップリングをカップリングにするというロジックだったのですが、何となくわかるような、でも気持ち悪いところがずっとあったのですが、これを見るとまさに非対称な反応、アメリカ側の攻撃対象というのは、指揮地は島であったり、より強力な空母だったりするわけじゃないですか。だけど、ソ連のほうは常に地上なわけですね。その意味においては、ある種、西ヨーロッパの地上というところにターゲットというものを置くことによってターゲット間の対称性というものを確保するという、ちょうど同じ時期なので、そういう発想もあったのかなというような僕はインプリケーションがあって、これを調べようかなと。

○道下氏 それはおもしろいですね。それはぜひ、この Global War Games も 2 つレポートがあるので、もし見つからなかったらおっしゃっていただければお送りしますが、それでヨーロッパ正面も当然入っているのです。僕は、そこの太平洋正面のシナリオだけ抜き出してこうやって御紹介したり提供したりしているのですが、当然全部読みましたけど、ヨーロッパ正面の話も。ただ、さすがに基本ヨーロッパの話なので、めっちゃめっちゃヨーロッパ正面の話はややこしくて、読んでいても何が何だかよくわからなくなってしまうのだけ。合六さんとか岩間先生がごらんになればもっとあああだ、こういう意味だったと。

○合六氏 ヨーロッパ側では NATO の中に NPG があるじゃないですか。その中にさらにスペシャルグループをつくって、いわゆる国務次官補レベルのある種専門家がずっと議論をするようになったのですが、最終的にこれは政治決定で行われるので、ある程度政治家がこれを理解していないとだめなので、その時に出てくる議論が脆弱性を見せることによってというところで政治家は理解しているようなのです。だから、ある種非常に優しい

言葉に包み込んで政治家は納得しているみたいな。

○道下氏 けど、考えてみたらえらい怖い話だと。

○合六氏 そうです。だからこそ、国内を説得することがより一層重要になってくるとい
う、80年代以降の話につながるのかなという。

もう1個、ごめんなさい。NSDD13のリンクというところですけど、僕は3年前このプ
ロジェクトでレーガンライブラリーへ行ったときに一応調べているのですが、3年前の
段階では全部ウィズドローアル・シート、一応公開という形でリスト上はなっているの
ですけど、実際箱をあけてみると、どういうメモが、どういうメモというのは誰から誰への
メモというのは全部書いているのですが、ウィズドローアル・シートという形で一切入
っていないという状況なので、ちょっと状況が変わっているかもしれないですけど、レー
ガンライブラリーはメールしたらすぐ返ってくるので、どういう状況かお聞きになってこ
の関連というのを見るのも一つかなと。

その上で質問というのが、きょう御報告にあった内容というのは基本的に太平洋軍とか
こういう方たちの現場レベルでの作戦とか、ある種陸軍とかとの競争関係の中での海軍の
位置づけ、レゾンデートルみたいなのを示すという話があった。もうちょっと上のレベル
の、例えばレーガン政権だとかいうところがこういう問題をどのように認識。結局このス
トーリーの最終は、リスクは最低限はあるのだから政治レベルですよというところに持
っていくわけじゃないですか。

○道下氏 最後はね。

○合六氏 レーガンではなかったとしても、もうちょっと上の政治レベルで一体どうい
う議論がこの辺なされたのか。つまり太平洋に意識が行っていたのかということをお聞か
せいただければと思います。

○道下氏 そこは、当時こういう話がわかってやっていたというのは、本当はアーミテー
ジとかあの辺の話なのです。アーミテージさんとかにはこういうお話はインタビューは
していますが、でも余り軍事作戦ではないのです、当たり前ですけど。だから、軍事作
戦になると私の印象としてはもう海軍がドミネートして、もう陸軍なんかは興味ないわけ
ですから、朝鮮以外は全く興味ない世界で、もう花形はヨーロッパなわけですから、そ
ちでみんながあがあやっていて、こっちはもう本当に極東のペリフェリーな話で、ペリフ
ェリーがどうにかペリフェラルに完全にもう、ど田舎の全く関係ない世界からそれでも都
会の生活に多少影響があるのですけどみたいになったぐらいな話なので、ああなると高い

レベルの政治、私もそのリンクは探そうとしていましたけど、余り直接はなくて、ただ、海洋戦略がおもしろいのは、海洋戦略は基本的に海軍がつくっているという、太平洋軍ではなくて海洋戦略はグローバルなので、ヨーロッパ戦域の話も当然入りながら、その中の一つとして太平洋戦域が出てくるので、そこは本当にすごいレベルの認識があって。そこで政治的な意味で一番重要な役割を果たすのはレーガンですね。レーガンがもうぎゅっと指示していたので、彼がリードしていたから、彼も好きな人と嫌いな人すごくあるけれども、彼が指示していたからいけたというところはあるし。

ですから、実際、軍事戦略的な方面から見ていくと、アーミテージさんとか政治的な方面のアクターというのは余り関係がないという印象ですよ。本当に軍人たちが勝手にとか議論していますし、日本のほうだってそれは同じで、基本的にもう海幕がやっているわけですよ。海幕がやっていて、ほかの人たちというのは多分わからない。海幕の中でも要は防・防・防というか、防衛のほうをやっている人しか知らない、密教の世界みたいなもので、それ以外の人割合、表の話を結構自衛官でも信じている人が多かったと思いますので、そういう意味ではシビリアンコントロール的には問題のある話なのです、これは。全然わかっていない。でも、アメリカのほうはシビリアンコントロールだからわかっていましたかということ、アメリカだって多分この細かい軍事戦略のこんな議論はそんなに一部関与している人以外は知らなかった、そんな興味もなかったと思うので、そこはどこの国でもそんなに大きく変わらないのかなという気はします。

あと防衛省のシビリアンでも、多分この人は相当わかっていたなという人がたまにいて、名前は失念してしまったのですが、割合早く亡くなられた方で、日本の対潜水艦戦の重要度がそんなので結構、あと機雷の掃海とか機雷戦と ASW というのは日本の重要なあれだったから、機雷を大量にちゃんと導入しないとだめだみたいな形に尽力した人とか、そういう人はいたのだ。

○ 氏 材ツさんじゃないですか。

○道下氏 材ツさんじゃなかったな。早く亡くなられたのですが。いずれにしろそういう方もいたので、そういう人は結構理解していたのではないかなと思いますけど、基本的には軍がやっている世界だなというのが私の印象です。[ここで言及されている人物は、池田久克氏]

あとは政治のレベルの話でリンクさせるのが、この Defense Guidance。Defense Guidance は基本的にそれがもとになって、NSDD は結構空中に浮いているという感じで

ふわふわとあって、Defense Guidance は結構具体的なガイダンスとして意味があって、それに基づいて Maritime Strategy なんかもつくっていますというのが常に書いてあるので、そのリンクはある程度見えると思うのですが、ただ、それが直接的にリンクしているかというところはそうでもないで、実態はそれほどこの国だって同じで、日本だって防衛計画の大綱で何か作戦計画つくる気ありますかという、それと別の問題で、防衛計画とか別の話なので、世界が。だから、そこは違っていいのかなというか、それが普通だし、私はどちらかという、今回のこのプロジェクトでは作戦計画的な世界がどうなっていたかというのを見ているので、そのリンクは余り強くは感じないというのが実態です。

○合六氏 1点だけ。5ページのさっきもちょっと触れた、核戦争の役割が低下して、現実には「protracted conventional war」が重要に。これというのは、さっきおっしゃっていたこのアジア・太平洋の地域における regional military balance がどちらかというと、アメリカ側に優勢だったからそのように変質したのかということを知りたいです。

つまり、ヨーロッパ側は、最後の最後まで通常戦力では認識上は少なくともあつちのほうがずっと強いというイメージじゃないですか。だから、通常戦力を前面に掲げるというのはなかなかしにくかったと思うのですが、この辺はどういうことなのかというところをもし御存じでしたら。

○道下氏 そこは軍の中でも多分、海軍の人たちは海上戦力を使っていい感じで戦えたらこんな感じですよという戦略をつくっているわけだから。

○合六氏 では、ここは海上戦略ということですか。

○道下氏 いや、ただ Defense Guidance なんかもこうなっているのです。だからそれは、レーガン政権は本当に結構そういう方向性。考え方としてはレーガン政権も一枚岩ではないわけで、ある人は核戦争勝利戦略みたいなことを言っていたわけだから、そういう人もいれば、いやいやそんなものはあり得ないから核戦略は重要で war fighting できるようにすることが一番、ソ連がどうやら核戦争勝利戦略を持っているから、nuclear war fighting をやる体制になっているから、それをこっちも war fighting できる体制にしておかないと抑止できないでしょうという感覚でやっていたと思います。

ただ、ではそう言っていた人が核戦争をやるべきだというか、本当に核戦争で勝つ準備をすべきだと思っていたとは思わないわけです。そこはやはりお互いに、ソ連もアメリカも核戦争にエスカレートしない世界というものをなるべくつくろうという努力は相当していたと思いますけど、でも余りそれをやるとヨーロッパが逆に怖くなって来るわけですよ

ね。核戦争へ行かないで終わらされたら絶対負けるから、ヨーロッパだけとられて終わりかという。だから、そこはもうせめぎ合いで、さっきのスイング戦略なんかも結構最後まで残ってなくならなかったのです。なぜかという、それをなくしたらヨーロッパが大騒ぎになってしまう。だから、こんなものやらないだろうというのがだんだんこうわかってきていても、正面切ってスイングもやりませんとは言えないわけですよ、それはヨーロッパのことを考えて。それで何かぐにやぐにやごまかしてやって。だから、みんなそれぞれの立場があるから、NATO の立場もあるし日本の立場もあるし、アメリカだって海軍とか陸軍では立場も違うから、そこをぎりぎり攻めて本当にこれが戦略ですとやってしまったらもう絶対破綻して Collision が維持できないわけですよ。だから、そこは詰めていったらどこかで何かすれ違うというか、あれここで核になるよねとか言っているかと思えば、いや **protracted conventional war** ですと言ってみたり、そこはその矛盾というのはやはり解消されずに終わっているのだと思います。

○合六氏 まあ、ジレンマはありますよね。

○道下氏 それはそれでよかったのだと思うのです。

○岩間氏 私も、ヨーロッパ正面というのは相当時間感覚が違うなという感じがあって、ラインまで来るはずがないでしょうというのがヨーロッパの感覚で、そこまで来られたらドイツはもうほとんどなくなるわけですから。

○道下氏 絶対その前に核使用という感じになるわけね。

○岩間氏 その **threshold** の決断をもっと前に、多分東ドイツに入りそうになったらもうするでしょうというような意識で少なくともドイツ人はいるので。

○道下氏 それはそうですね。

○岩間氏 そんなオホーツクでこういろいろせめぎ合っている……。

○合六氏 それが 70 年代末のカーター政権のときに、まさにニューヨークタイムズか何かのリークか何かの記事で、カーター政権内の高官か何か、ドイツはそう思っているのですが、アメリカは一定程度のドイツのロストは仕方がないと思っているという議論が表に出てしまって、米独関係はただでさえカーターとシュミットは悪いのに、さらに俺たちを見捨てる気かというのでえらいもめたということがあったのです。本来であればラインを越える前、あるいは東ドイツに入る段階で核使用というのが想定されないとドイツ人は落ち着かないところですけど、実際ではアメリカ人が本気でそこまでかというところがという。

○岩間氏 使えたかというと使えなかったかもしれないと。

○道下氏 そこはもう本当にわからないという。

○岩間氏 それでも、多分タクティカルに踏み切ってしまうと、そこからのエスカレートをどうやってコントロールするかという誰も知らなかったわけですね。ぐるぐる回ると結局戦争できないよねということに。

○道下氏 そうそう、だからまあそれでよかった。

○岩間氏 もう 80年代に入るとなっていたのです。だけど戦わなければいけないというので。

○道下氏 一応そういうフィクションの準備はしておかないと。

○岩間氏 そう。こういう中距離核が入り、短距離核が入りという話になると、もうドイツの国内はもたなくなっていて、何かの折にドイツ統一した直後ぐらいに、高坂正堯先生が、いやあ「ぎりぎり間に合ったよね」とおっしゃったよね。もうもたなくなっていたと。そういう感覚は、本当に戦略観の矛盾みたいな、想定と現実にはできることと国内的に持つことの矛盾みたいなものが、「いやあもうドイツ本当にもたなくなっていたよね」ということをおっしゃったのを何となくきょう思い出しましたけれども。

もうそろそろ時間なので終わりますけど、これただ組織の記憶としては多分米海軍の中に残っていて。

○道下氏 残っていますね。

○岩間氏 これだけ切り離されて多分今度中国とか朝鮮半島有事で相当インプリケーションを持ってくると思うのです。ソ連側も当時に比べて相当こちらを向いているのではないかなと思うのですけれども、そのあたりどういう感覚を、今日的にこれはどういう影響を与えるというような感覚を持っておられるか、最後にお問い合わせできますか。

○道下氏 それをぜひ、これをもしよろしければ見ていただきたいのです。 (*Lessons of the Cold War in the Pacific* available at https://www.wilsoncenter.org/sites/default/files/lessons_of_the_cold_war_in_the_pacific_one_page.pdf)

まさにこのレポートを書いたのはそういう問題意識でして、もし持っていらっしゃらない方がいたら、今追加で刷ってまいりましたので。

これの例えば 2 ページと 3 ページを見ていただければ。要はこういう状態なのです。昔、冷戦のときはオホーツク海がバスチョンで、この絵には載っていないですけど、sea

control 線というのと sea denial というゾーンをつくって防衛しようとしたと。今度は中国が南シナ海をバスチョンにして第 2 列島戦と第 1 列島戦でこれを守ろうとしているという構図なのです。だから、結構そっくりで、よく戦略「strategic culture」という言い方があるじゃないですか。あれはあれでああいう研究は重要だと思うのですけれども、やはり culture ではなくて地政学的な要件が同じで rising power と status of power があって、こういう似たような地理環境にあると同じことをやるんだよという。余り関係ないだろう、それ誰がやってもというのを思わせるところで。

中国も今のところ南シナ海から直接アメリカの本土を撃てるだけの JL-2 はそこまでの射程がないのでまだできませんけど、将来的には当然そういうのもやりたいと思っています。ただ、ちょっと申し上げましたけど、南シナ海は交通量がめちゃくちゃ多いので、そこをつくるとあのようなバスチョンにはならないと。そうすると、そこをお互いにちょっと違う環境で潜水艦同士の戦いみたいなものをまたやらないといけないし、そこは教訓とは違うのですけれども、ちょっと違うところがありながらも大きい絵は割合に出るみたいな競争になるかなということ、そこは本当にやはり。

実は、24 ページに著者の紹介が載っているのですが、このピーター・シュウォルツというおじちゃんが、この人が実は最初のバージョンの海洋戦略を書いた人なのです。84 年の海洋戦略のクラシファイドのバージョン、まだ公開されていないときのバージョンを書いた人で、だからもうすごい、私が困ったらいつも彼に聞いているのですが。このおじちゃんはそういうことを言っていて、まさに今、当時の状況にかなり戻ってきているというか、似たような状態になっているから教訓を学ぶべきだと。最近インタビューを受けることがすごくふえましたと言っていて、それはみんなやはり気づいていて、あれっ何か昔と同じようになったからピーターが知っているに違いないといって電話をかけてくると。

アメリカの海軍は教訓事項はあるし、ちゃんとコマンドヒストリーみたいなものがあるし、ウォーゲームのあれも持っているから資源はあるのだけど、もうみんなほこりをかぶっていて使っていないし、あともう一つの問題としては、米海軍の将校たちが昔の冷戦の感覚を持っている人がいないので、圧倒的に、空母機動部隊なんか絶対安全で戦域から相手をぼこすかにやっつけるという戦い方しかしていないので、空母を危険な地域に入れるという感覚がないと。だからたるんでおると。実は、このときの研究会の様子が C-SPAN にも載っているのですが、もしあれだったらググっていただければ、lesson of the cold-war と同じようなタイトルで「ピーター・シュウォルツ」と「Michishita」とか入ってい

ただければ珍しいから絶対出てくると思います (“U.S.-Japan Military Strategies in the Pacific,” C-SPAN, March 7, 2016, available at <http://www.c-span.org/video/?406041-1/usjapan-military-strategies-pacific>)。あれは warship なのだから battle ship は戦って沈むこともあるのだよと言っていて、あと彼が同時に言っていたのは、アメリカの空母はすごいので少々やられても沈まないのだなんて言って、やられてもすぐ直して出てくるのだからそれでいいのだと。ただ、そういう運用の仕方というのはアグレッシブに空母を使うというような感覚をもう全く持っていない人々になってしまっているから、クリエイティビティに欠けるようなことになっているから、そういう意味でも昔のことをちゃんと勉強しないとだめだよねみたいな話をしていました。

ですので、これはどこが同じでどこが違うというのはまた別のあれで、そこも研究したり発表もたまにしています。もし御興味があれば、メールアドレスを書いてありますので御連絡いただければ、そっちのほうを書いたものもお送りしますし、実際この中でもある程度書いていますけれども、結構似ているところと違うところがあるので、そういうところを踏まえつつ、いい教訓を学んで、今回も冷戦で終わる、できれば冷戦に行かずにマイルドな競争で、中国にちょっとこれはやっても余り意味ないなと思ってもらって諦めてもらうというように持っていかれたらいいと思っております。

○岩間氏 ありがとうございます。大変示唆に富んだお話で、冷戦期とは正面が多分ひっくり返るのだらうとは思いますが、ここだけで済む話ではなくて、宇宙まで多分入って、サイバーとかも絡んでいろいろな面が出てくるのだらうなと思います。

きょうは本当におもしろい話、ありがとうございます。ここで終わらせていただきます。(拍手)

○道下氏 どうもありがとうございました。